

第 41 回

オンライン読書会 (28) (ZOOM)

<参加できる阿佐ヶ谷婦人公論読書会>

「おんたとおとこの工夫 生涯を連れ添うために」

2022.8.30 開催



新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、
オンライン読書会を開催しています。

★ テキスト・テーマ

- ① 夫婦関係の悩みの NO.1 は? : All About News
- ② 健康な依存 : AERA2022. 8/8 号 午後 3 時のしいたけ. 相談室
- ③ 「夫婦の自立」について
- ④ 愛と性の生涯発達 男性編



★ 参加者 : 9 名 (女 7 名、 男性 2 名)

★ 参加者の感想

今回読書会のテーマは二つでした。ひとつは「自立について、最近の考え方」、もう一つは「愛と性の生涯発達、男性編」でした。資料は各自持ち寄りとなっていました。「その他の提案として」提供された資料は『健康な依存』が幸せに通ずるパートナー同士の『ありがとう』を伝えあってみる AERA(資料 1) の記事と AllAboutNEWS の「夫婦関係の悩みの NO.1 は家事分担」記事(資料 2) が提供されました。

資料 1 は 70 歳の女性からの人生相談、その悩みへの回答のキーワードとして「健康な依存」で相談者はまとめています。読書会はこの女性への共感の意見が発端となり、それぞれの方の今と重ね合わせて意見が出されました。

次の資料 2 は統計資料を眺める形であり意見は出ませんでした。「パートナーに対する最も大きな悩み」アンケートでは与えられた選択肢はほぼ 20% 前後で次のようになっていました。家事分担 > 悩みなし > セックスレス > 性格が合わない。さらにこの選択肢を結婚継続年数で示したグラフでは 20 年以上で「性格が合わない」が急速に増えることと、「家事分担」が年齢を問わず 20% 以上の高率を維持していました。

長谷川先生からのコメントでは「性格が合わない」の中身には多様性があるとの指摘がありました。この時私もこの「性格が合わない」の選択肢のくくりが気になりました。

二つの目のテーマ、いよいよ「愛と性の生涯発達、男性編」です。当日の男性参加者は先生と私の二人、当然「正直に」先生から提示された男性の性発達プロセスに沿って二人のちょっとリアルな語りがありました。多分その語りで女性の方々は、男性自身の男性性への情報の貧困さに驚かれたのかしれません。

この読書会はもともと「婦人公論」を題材としていることから、女性の視点での事象の検証が主

流でした。今日の題材も、70歳女性の叫びともいえる「夫への絶望感と怒り」をどう受け止めるかでした。多分、女性の方にとっては、この叫びは容易に共感を感じずるものであったと思います。男性である私はその表現されていない夫の声も聴いて欲しいとの感じもありましたが、しばし静かに「女性の求めていることへの理解がない」かつ「自分のことしか考えていない」男性として、意見を伺っていました。意見を求められ「相談された方は、離婚された方がよいのでは」と発言しました。妻は「こうありたい姿」をすでに見つけているのではと思ったからです。

資料が紹介している相談者の回答は「健康な依存」(他人のために役立つ行為をし、「ありがとう」と言ってもらえる関係)をそれぞれが外でもいいから作ることを提唱していました。私はこの助言にちょっと違和感を覚えました。この助言は私たちが求めているリマリッジとは違うのではと。

一度しかない人生しかもすでに50年近く連れ添っている。読書に没頭する夫、その夫の行為を可能にするために、家事すべてをこなす妻。しかも妻から見れば「寄り添った」記憶がない。こんな関係性でも「夫婦」はしている。相談は何か目覚めた妻から出されている。そこで出された妻の「願い」は文面からは「寄り添って欲しい」で表現されることだと読み取れます。そして、この二人の関係は団塊の世代夫婦の典型であり、熟年離婚予備軍的な題材として提示されているようでした。

参加者からは当然妻の怒りへの共感の意見はでてきましたが、長谷川先生はこの関係性をそれぞれの個性に求めるのではない見方を提示され、次の意見を待ちました。意見はこの夫婦関係への意見ではなく、それぞれが営んでいる夫婦関係に光が投射され始め、夫への厳しい評価が続きました。ある意味では夫にとっては最も厳しい、ネグレクトとも思われる発言も出てきました。

しかし、意見の流れは今までの読書会で培われた私たちの自身の性意識とそれの伴う行動での「時代と文化の閉塞性」についての学習結果への言及と気づきから変わり始めました。不当に自立の条件を制限されてきた女性側からまず覚醒する。その覚醒をしっかりと相手の男性側が受け止めることができれば、男性側も自らが「時代の閉塞」の中で生きていい自身に気づくことができる。

つまり、二人の個性が原因ではなく、ある意味では単純ではあるけれども一人の力では御し切れない「性教育の貧困」、「男女・ジェンダー差別」、「時代と文化の閉塞性」により、親密性をより濃密にする条件と機会を奪われてきたということを伝え、いまからでも修復は可能であるとの回答を提示できるのではないかと思います。

その結果、ふたりが共に同じ「閉塞性」の中で日々過ごす中での営みへ肯定的な理解になるよう「過去の検証」行い、そして次に「性科学」、「心の科学」、「アートとしてのコミュニケーション」を学び、身に着ければ、リマリッジへの道は開けるとの感触をつかむことができました。

まとめで長谷川先生が言われた「協会は『心理教育』的な手法にも力を入れ、婚前、結婚後、その後も含めリマリッジ的な効果を提供できるのでは」の志向を共有できたと思いました。

この間の読書会では「『女性は便所』が象徴する前近代的女性観が今でもあるのではないかと伺わせる日本なのでは」、「『女性の賃金をあげる』ことこそ、広く男女差別・格差をなくす早道」と

の合意の流れができてきています。その一方で、性理解の貧困から自らの男性性役割と特性を「ポジティブな性欲」と定義し、次世代を生み出す女性との共同作業としての生殖能力を、風俗産業に、極端な場合は「戦術」に貶めている時代でもあることにも直視しなければならない辛さも語られてきました。

出会い、妊娠、出産、育児、教育、自立への共に歩むパートナーシップを培うことで、一つの種としての次世代へ引き継ぐ役割とともに喜びを共有できるプロセスを家族心理学は明らかにしています。そして今、科学と当事者の勇気により性の多様性の理解が広まり、同時に「家族」としての概念規定にも影響を与えてきています。

ここまで書いたことを前提にして、資料2のアンケート結果を改めて見てみると、先生が言われた「性格が合わない」と言った括りで、選択肢を作った調査そのものの質が問われると同時に夫婦関係を評価する要因分析(設問、選択肢)が十分推敲されていないことが分かります。

臨床で知る今まさに起こっている問題と背景は今回の読書会でも知ることができました。事例紹介にあった欧州の国の夫を持った女性の訴えです。これをどのようなシステム思考で考えるか。70代の女性のような訴えを発する前に、ふた周りほど若い世代の方からの「『自立』を選択するのが私たち世代」との発言を伺い、「未来は明るい」と安堵しました。

(家族支援士 進藤一俊)

<オンライン読書会はいかがでしょう？>



阿佐ヶ谷の洒落たお店でのお茶会は、しばらくおあずけですが、
長谷川理事長のご講義が画面から溢れてくるオンタイムのセミナーもまた必見！
夫婦生活につまずいている方はもちろん？円満な方やおひといさまのお知恵も拝借しながら、おんなどおとこが添い遂げる工夫を、家族カウンセリングの視点から学び合いましょう。協会員なら、どなたでもこのオンライン読書会にご参加できます。

★次回は第42回 9月26日(月) 20:30 ZOOM開催です。

理事長ご提案のテーマで話し合います。会員の皆さま、奮ってご参加くださいね！

<会員限定>

オンライン読書会 (ZOOM) に参加ご希望の方は➡のQRコードに (森友ラインあて)、お手持ちのスマホでカメラをかざして繋いでください。

